『歎異抄』研究における背景論の問題点について

『歎異抄』には、学問的に研究しやすい書であるとは言えない面がある。成立、流伝等に不明な点が多いからである。従って、従来の本書に関する膨大な著作・論文等に関しては、解釈・主体的受け止め（自己領解）に類するものが主であったと言わざるをえないのである。もちろん、ある書の思想的内容を解釈するということは、その依って立つ背景について考察することなしに為すことはできないのであるから、『歎異抄』研究についても、このような点において注意が払われなければならないのである。

ここで、ある著作における成立の背景論に対するとらえ方を整理してみるならば、

①思想内容に直結する背景論
②表現に影響を与える背景論

というように大別されるであろう。これを仏教書の場合で考えてみるならば、①については、例えば師から受け継ぐ教えが中心になる、といったようになるであろう。また②については、文法等を含む国語学的見地が求められるところである。さらに①②の双方に影響を与えうる問題としての、広義の文化論という観念も導入され考察されねばならないはずであるから、実際には

①主題に関する思想背景論
②広義の文化的背景論
③表現に関する背景論、国語学的背景論

というように整理されるであろう。

これを『歎異抄』に関してもう少し具体的に考えてみるならば、

①イ、師親鸞の思想
　ロ、師親鸞も属していた法然あるいは法然門下の思想、そこにおける異義的状況

ハ、基本的浄土教思想あるいは仏教思想、但しこの場合「日本的」という形容詞が付いた形での考察も求められる。

②広義の文化的背景論

③イ、平安後期あるいは鎌倉期の文法的問題

ロ、それらの時代の仏教書他の国文学作品との比較

といったように考えることができる。②については①③双方に関わる問題として考えられなければならないということは前記の通りであるが、その対象とすべき事項は多岐にわたり、仏教学的範疇を超える要素があると考えられなければなるまい。またこのような三点は、それぞれが別個に独立的に研究されるのではなく、『歎異抄』の内容をふまえた上での統一的視点によって常に総合的に考えられなければならないことは、いうまでもないのである。

仮に以上のように整理されるとするならば、どのような点が問題となるといえるのだろうか。これらの視点が、何人かの研究者の意識の上あるということは間違いないのであろうが、それが形となって表れているとは言いにくい状態であるということは、何らかの困難さがひそんでいるということであり、それを問題点として整理しておく必要があるだろうということである。

一つには、直接的資料の少なさがあげられる。『歎異抄』は、語録的性格ということもあってか、書名を出して引用をするといったことをほとんどしない。わずかに『唯信抄』（真聖全二、七八四）『和讃（高僧和讃）』（真聖全二、七八七）のそれに近い例があるくらいである。よって、思想的源泉ということを考察する場合に、師親鸞の思想が中心となるという基本線は当然としても、さらに幅広い視点によって『歎異抄』の内容に結びつきうる事項を探索した上で考察しなければならない、ということなのである。また著者とされる唯円に関する史料も、ごくわずかを除いて存在していない状況であるから、その研究は困難といわなければならない。

二つには、重層性に対する意識の問題ということがある。ここでいう重層性とは、例えば前記①については、直接的な師親鸞の影響のみにとどまらない、ある種複雑な視点が要求されるということである。①イ・ロ・ハのそれぞれの問題についての個別的研究は存在しないわけではないが、それらが統合的に考えられるべきであるという意識が見られるものは、かなり少ないというのが現状である。このような点は②③の要素も含んで

形成されると考えるべきであり、まさに重層的問題となるということでもある。

さらに、明らかに前記のこととも関連するが、学問横断的な研究の必要性ということがある。『歎異抄』研究においては真宗学あるいは仏教学的立場が中心となるのは当然であるが、特に国語・国文学的分野との協力が不可欠のものであるのは明白である。国文学の側からのいくつかのアプローチも当然存在するが、今のところ領域を超えた研究協力はあまり見られない状況であり、早急に改善が検討される必要があるだろう。

このような研究方法論を遂行することは容易ではないことは確かであるが、その知名度・重要性からいって未だあいまいな所の残る『歎異抄』という書の性格把握には欠かせない諸問題である。またこのような点は単に成立時の背景論にとどまらず、その流伝の場合にも深く関わる。例えば、前記の③の要素がなくなるという部分があるが、①における重層性は『歎異抄』の受容という形で新たな要素を加えるであろうし、②の問題はその対象の多様性において拡大する部分があるが、本質的には共通の性質をもっていると考えていいだろう。つまり、これらの背景論に対する意識が『歎異抄』研究の今後の展開において、重要な鍵を握っているともいえるのである。

本グループは、『歎異抄』の思想背景を研究テーマとしている。このテーマに関しては、従来前記①イ中心であり、①ロ・ハについては表面的つながりが指摘されることはしばしばあっても、その有機的考察には欠けるところがあった。後掲の松尾の論考は、①ハに関連するものであり、深励らによって指摘されていた『歎異抄』第五章と『往生要集』の関連性を、具体的にもう一歩踏み込んだ考察として展開させようというものである。また、原田も第三章あるいは第十三章にかんして①イ・ロに関連する論考を発表している（印仏研一〇六、二〇〇五、真宗公論四〇、二〇〇六掲載予定）。このように研究としてすすめられるということである。

またこの研究において特に留意されなければならないのは、法然・法然門下および初期真宗教団との関係である。それぞれの書物と『歎異抄』との関連性が従来からいくらか指摘されているが、それらを基礎にさらに研究を深める必要がある。また現時点でいえるであろうことは、『歎異抄』が親鸞の言葉を書き留め、そのことが大きな意味をもったということの他に、当時の浄土教的状況に近づける（単に異義的状況が書かれているということだけではなく）要素も含んだ書であろうということである。このような点は『歎異抄』という書のもつ性格を明かすことでもあり、

本書の教学史的位置づけもそのことを考えることによって初めて正確になりうると考えられよう。これは①イ・ロの視点による論考によって導き出されることであるといえるのである。

さらに①ハに関しては、浄土教的概念の問題もある。例えば『歎異抄』という書においても「念仏」「信心」といった用語・概念が重要な意味をもっているということは周知のことであるが、それらが親鸞の述べることのありようと全同であるとはいえない面があることには、注意が必要であろう。つまりこれらの概念の浄土教理史的展開をふまえた上での考察も欠落させてはならない要素となるのである。

②③に関しては、最も研究困難なところといわざるをえないが、すでに述べたように、さらなる学問的交流が要求されるところである。また安良岡康作氏は、「『歎異抄』の述作は、外辺的超越性を保って、中央歌壇との関係が全くない位置において行われていることは言うまでもない。その制作・流布が中世和歌に与えた影響も全くない。従って、中世文芸史上の『歎異抄』は、一種の超越的意義と位置とを有して、主流をよそに、独自な作品性を発揮している存在ということになる。」（『歎異抄全講読』五八五頁）と述べて、『歎異抄』の性格付けを行っている。これをみるとその性格の一端とともに、隔絶性ゆえの研究対象としてとらえること難しさも表しているといえる。しかし、実際には関東における仏教文化というものを考察の対象とすることは可能であるし、そこから浄土教他の仏教（法然門下を含んでいる）あるいは文化的状況におよぶ糸口はあると言えないだろうか。氏の言う独自性による大きな意義も認めつつ、その隔絶性のみにとらわれない考察法も必要となってくるといわねばならないだろう。

以上述べた問題点は、個別的問題点ではなく総合的にとらえられるべきものである。このような背景論に対する意識が根底にあってこそ、今後の客観的『歎異抄』研究というものも展開するであろうことを、再度強調しておきたい。

なお必要な註記は文中に入れたことをお断りしておく。（原田哲了）